

マツカワ栽培漁業における北海道区水産研究所の役割

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 水産総合研究センター 公開日: 2024-07-09 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 森岡, 泰三 メールアドレス: 所属:
URL	https://fra.repo.nii.ac.jp/records/2009821

This work is licensed under a Creative Commons Attribution 4.0 International License.



マツカワ栽培漁業における北海道区水産研究所の役割

マツカワ資源は積極的な種苗放流によって急速に回復しています。当水産研究所は、マツカワ栽培漁業の実現に向けた様々な調査研究を行っています。

(栽培技術研究室 森岡 泰三)



マツカワ(写真1)は一時絶滅の危機に瀕しましたが、近年、積極的な人工種苗放流によって資源が急速に回復しています。この魚は全長80cmに達する高級魚で、成長が速く、放流した翌年の秋には全長40cm(体重700g)前後に成長します。北海道立釧路水産試験場の資料によれば、2008年における種苗放流尾数は149万尾、水揚げ量と水揚げ金額は、それぞれ130トン、1億2,000万円(暫定値)となっています。噴火湾から日高にかけての水域では栽培漁業の事業化が進められており、道東では事業化への見通しを立てるための放流試験が進められています。

マツカワの栽培漁業を成功させるには、奇形や病気ではなく、血縁関係についても健全な人工種苗を安定的に生産する技術を確認することが先決です。さらに、種苗放流に係わる経費の削減と水揚げ増の両立を図ることが不可欠です。海区水産業研究部は、血縁関係の問題や放流サイズの小型化に関する調査研究を北海道の試験研究機関や栽培漁業推進協議会などと協力して行っています。また地域に根ざした栽培漁業を模索していただくため、調査用の種苗を提供しています。提供した種苗は漁業協同組合や町の施設で一定期間育成され、その後、放流に適した場所や漁業の実態などを調査する目的で海に放流されます。このような調査研究では水揚げによる放流効果の把握が不可欠であるため、道東全体で共通の様式による市場調査が進められています。

放流サイズの小型化については、4月に生まれたマツカワの半数を8月に全長5cmで厚岸湖に放流し、残りを8cmになるまで育成して9月に放流する



写真1 マツカワ

試験を4年間続けて行い、これらの放流効果を比較してみました。1~3歳魚の水揚げを比較したところ、放流尾数に対する水揚げ尾数の割合(回収率)は全ての事例で8月5cm群が9月8cm群を上回りました。8月は9月以降に比べて水温が高く、餌生物が豊富となっており、生育に適した季節に放流すれば放流サイズを小さくできることがわかりました(表1)。

さらに、市場調査の方法が統一されていますので、種苗の放流効果は厚岸以外の水域から放流された群についても明らかにできます。つまり、生産技術、血縁問題、コスト削減、種苗の提供および市場調査体制の整備を通じて栽培漁業の成功に貢献する役割を当研究所は担っています。今後はえりも以西海域で放流された種苗との交流の状況や、放流魚の子孫である天然魚の発生の状況などを調べ、より広い海域における栽培漁業の発展に寄与したいと考えています。

表1 厚岸放流群の回収率

種苗放流			回収率 (%)					累積
平成年	群名	尾数(尾)	水揚げ年(平成)					
			15年	16年	17年	18年	19年	
14年	8月群	11,000	3.8	6.7	1.9	0.0	0.0	12.4
	9月群	11,000	2.3	8.2	1.0	0.1	0.0	11.6
15年	8月群	7,500		1.9	2.9	5.9	0.7	11.4
	9月群	7,500		1.4	3.4	3.7	0.2	8.7
16年	8月群	20,000			7.2	12.1	2.0	21.3
	9月群	20,000			2.5	6.2	1.6	10.3
17年	8月群	15,000				9.8	17.9	27.7
	9月群	13,000				7.6	6.6	14.2
総漁獲量(kg) *1			1,643	3,433	4,631	6,131	18,553	
標本抽出率(%) *2			2.81	7.32	6.43	4.39	5.45	

*1 十勝、釧路、根室管内における年間漁獲量

*2 標本重量/総漁獲量 ×100